群教セ	G01 － 02
	令2.275集
	国語ー小

書き表し方に着目して推敲し、よりよく表現できる児童の育成を目指して

――文章をよくする視点を見付け、活かす対話的活動を通して――

特別研修員　髙木　理恵子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

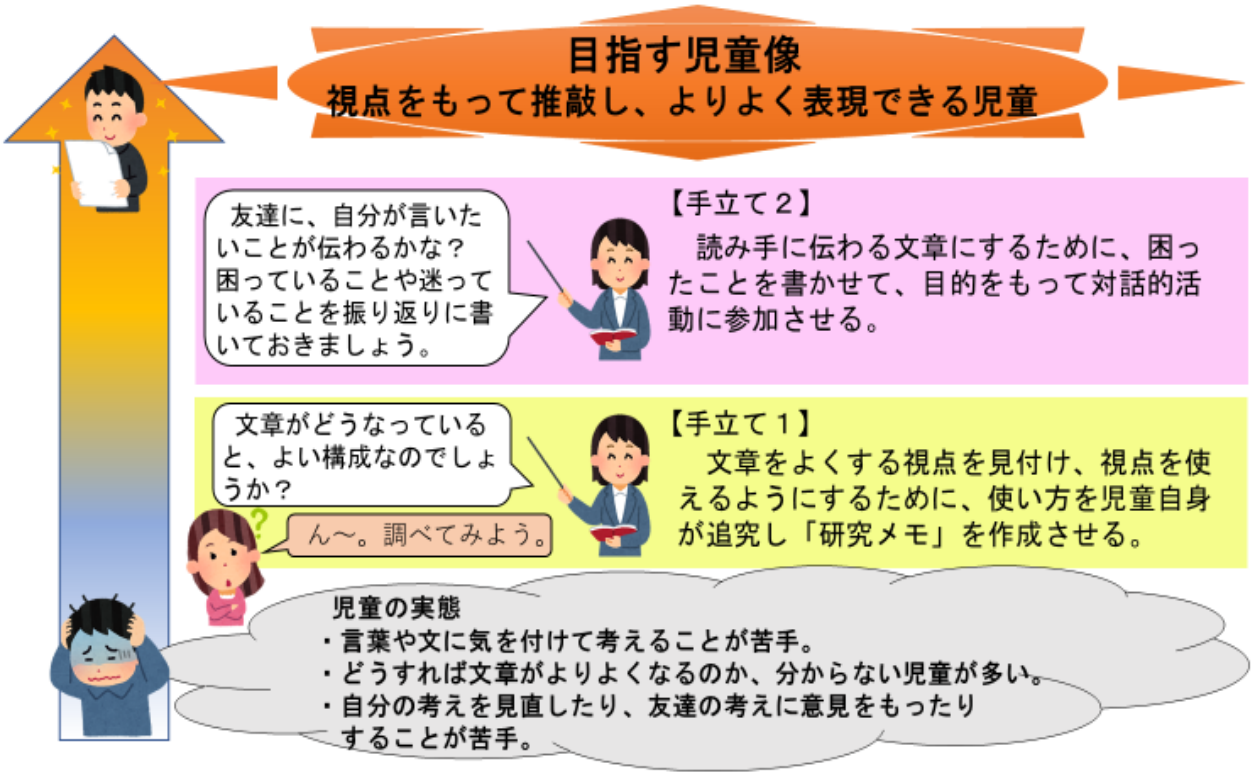
はばたく群馬の指導プランⅡでは国語科の課題として、言葉の特徴や使い方等を理解させると共に、多様な言葉を使って自分の思いや考えを広げ深める学習を繰り返し行うことが求められている。

本校の児童は決められた文の構成のとおりに書ける反面、仕上がった作文の推敲は誤字脱字を確認するにとどまり、文章や言葉に気を付けて推敲できる児童が少ない。これはよりよい文章にするためにはどのような視点で推敲すればよいのかが分かっていないことと、自分の考えを見直したり友達の考えに意見をもったりする経験が少ないことが原因と考えられる。このような実態の児童に対して、児童が主体となり「推敲する」とはどのようなことに気を付けて見直したらよいのか考えさせる必要があると考える。そして、自分たちが見付けた「文章をよくする視点」を使い、友達との対話の中でよりよい文章を考えていくことで、それまで思い付かなかった言葉や文へと工夫され、豊かな表現力の育成につながると考える。また、対話的活動では、推敲することへの不安や困り感を話題に話し合い、不安や困り感を解決することで、よりよい文章を書く力の育成につながると考える。

以上のことから、児童が文章をよくする視点をもった対話的活動を行い、友達と共に表現することの楽しさや奥深さを感じながら、よりよい文章を表現できる児童の育成を目指して、上記のとおりテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

手立て１　文章をよくする視点を見付け、視点を使えるようにするために、使い方を児童自身が追究し「研究メモ」を作成させる。

単元で身に付けさせたい推敲の視点に気付かせるため、間違いのある例文を用意し、児童自身に「修正箇所」を見付けさせる。教師は児童から出た「修正箇所」を「文章をよくする視点」として整理していく。

例：児童「『中』の段落がつくられていないと思います」→教師「これは構成ですね」

次に、見付けた視点について詳しく考えさせる発問をし、児童に「見付けただけでは使えない」ことを自覚させることで、推敲するためには視点について詳しく追究しなければいけない必要感を抱かせる。児童自ら追究する活動へとつなげ、視点ごとに分かれたグループでその具体的な使い方を研究する「研究会」を行い、「研究メモ」を作成させていく。さらに、「研究メモ」について発表し、児童同士の伝え合いで「文章をよくする視点」を学習していくことで、視点を具体化する。

例：教師「構成とは文章がどうなっているとよい構成なのですか」「『中』にはどのようなことが書かれるとよいですか」→児童「分からないことが結構あるな。詳しく調べてみよう」

手立て２　読み手に伝わる文章にするために、困ったことを書かせて、目的をもって対話的活動（相談会）に参加させる。

文章を推敲していく中で、「文章をよくする視点」を明確にもっていても、実際にどのような言葉を使ってどのように直したらよいかを考え、改善していくかは児童にとって難しいことである。そこで、分からない不安や困り感を解決する目的をもって対話的活動を行い、困ったことは児童同士で相談し合い解決させていく。その対話的活動を充実させるために、推敲して困ったことを前時の振り返りに書かせておき、自分の文章には、どのような言葉を入れたり表現を工夫したりすればよりよくなるのか、友達からのアドバイスをもらいながら、よりよい文章に整えさせる。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　例文から「修正箇所」を自分たちで見付けさせたことにより、どのようなところに気を付けて文章を見直せばよいのか考え、文章をよくする視点を学級全体で共有でき、同じ視点で学習を進められるようになった。

○　文章をよくする視点（原稿用紙の使い方、構成、文章表現、引用の仕方）ごとに児童自身が追究し「研究メモ」を作成したことで、児童が主体となって学習に向かうことができた。また、作成した「研究メモ」を基にそれぞれのグループが説明を加えながら発表したことでより理解を深められた。さらに、「研究メモ」は推敲の時間で有効に活用され、児童にとって推敲の手助けとなった。

○　視点が絞られたことで推敲が焦点化され、自分の文章が最初に書いたものよりよくなったという自己評価をしやすくなり「推敲できた」という達成感につなげることができた。

○　「相談会」で友達が読み手となり推敲したことで、読み手を意識してよりよい文章に修正できた。また、友達からのアドバイスで推敲に対する不安や困り感を解消できた。

２　課題

○　「原稿用紙の正しい使い方」や「構成」、「引用」については児童にとって追究しやすい視点だったが、修正する文の前後や全体の流れを読み取り、言葉や文を考える「文章表現」についての追究が難しかった。他の単元でも言葉に関心をもたせ、考える学習を取り入れる必要があった。

○　児童が「研究メモ」を基に推敲した時点で文章に満足してしまっていたため、対話的活動を活発にするための「困ったこと」や「不安感」がない児童もいた。そのため、「相談会」では読み合う友達を変えながら、文の細部にわたって読み返し、相手に伝わりやすい文章とは何か、視点に囚われず文章全体について考えさせ、直してみた結果を話題に対話的活動へつなげるとよかった。

実践例

１　単元名　「世界遺産　白神山地からの提言　―意見文を書こう―」（第５学年・２学期）

２　本単元について

本単元は、白神山地の概要について書かれた文章と、七つの資料とそこから考えをもった意見文が示されている。世界遺産となった白神山地の豊かな自然と、それを維持し、守ろうとする人たちや、決まりを守らずに白神山地を壊してしまう人間について考えさせ、意見文を書く教材となっている。児童が群馬の豊かな自然の一つである「尾瀬」について調べ、自分の考えの根拠となる資料を選択し、意見文を書くことを通して、書いて表現することを学んでいく。意見文は、読み手に自分の意見を正確に伝えることができるかが重要であるため、相手意識をもって説得力のある文章を書く力を養わなければならない。そのために、読む相手を同級生である五年生と設定し、同じ五年生にとって分かりやすいかを判断基準に推敲を行う。また、「文章をよくする視点」を明確にもって推敲することで、言葉や文について関心をもち、より分かりやすい意見文の書き方を習得することができると考える。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し、実践した。

目標	尾瀬の自然保護について考え、意見文を書く学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるようにする。 ア　意見文を書くために、様々な情報から原因と結果を結び付けて捉え、理解すること。 （知識及び技能） イ　文章全体の構成や書き表し方などに着目して、意見文を整えること。 （思考力、判断力、表現力等） ウ　積極的に相手や目的、内容に合わせた構成を考え、今までの学習を生かして相手が納得するかどうかについて留意して文章を書こうとする態度を養うこと。 （学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1) 様々な情報の中から原因と結果の関係を見出し、結び付けて捉えることができる。 （知識・技能） (2) 資料の文や言葉を引用したり、表やグラフなどを用いたりし、自分の考えが伝わるように文や文章を整えることができる。 （思考力・判断力・表現力等） (3) 自分の考えをもち、参考となる文章や資料などを活用しながら構成を考え、考えが伝わる意見文の書き方について学んだことを他の場面で生かそうとしている。 （主体的に学習に取り組む態度）

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・相手に分かりやすい意見文を書くための学習計画を立て、学習の見通しをもつ。
追究する	第２時	・白神山地に対する意見文を例に、意見文に必要な内容を考える。
	第３ ～５時	・尾瀬について知る。調べる。 ・尾瀬に対する自分の立場を明らかにする。 ・意見文の構成について理解する。
	第６ ～10時	・文章をよくする視点を見付け、分担（構成、原稿用紙の使い方、引用の仕方、文章表現）に分かれて「文章をよくする視点」について研究する（研究会）。 ・意見文を推敲し、相談会を開き、清書をする。
まとめる	第11時	・単元で学んだことを、どのような場面で使えるか考える。

３　本時及び具体化した手立てについて

本実践は 11 時間計画の第７時と第８時に当たる。第７時は「文章を読み返し、自分が言いたいことが表現できているかを考え、よりよい文章にするための修正点を見付けることができるようにする」ことをねらいとしている。文章をよくする視点について自分たちで研究し作成した「研究メモ」を使い、友達の意見文をチェックする。友達からの指摘を受けて、自分の意見文を見直し、推敲を行っていく。さらに、その推敲の際、困ったことを振り返りに書いておき、第８時の相談会で解決していく。

4　授業の実際

(1)　前時まで

例文から文章をよくする視点を見付けさせ、それを四つのグループ（原稿用紙の使い方、引用の仕方、構成、文章表現）×２班に分け、それぞれのグループが研究し「研究メモ」を作成した。そこには、推敲する際の視点が具体的に書かれており、本時で友達の意見文をチェックする際にはこの「研究メモ」を使いながら推敲を行った。

(2)　第７時　導入　本時のめあてを把握し、チェックを入れる流れを確認する

研究メモを示しながら、それぞれ研究した内容を大まかに確認した。

> **大まかな研究内容**
> 引用･･･出典やページを示すこと、短い文は「　」で括ること、長いものは２字下げて書くこと。
> 原稿用紙･･･「　」の使い方、段落は１字下げる、『　』の使い方。
> 構成･･･始めに自分の意見、中に根拠や事実、終わりに自分の意見のまとめや感想。
> 文章表現…意見と根拠が分かれているか。事例が一つずつ整理されているか。

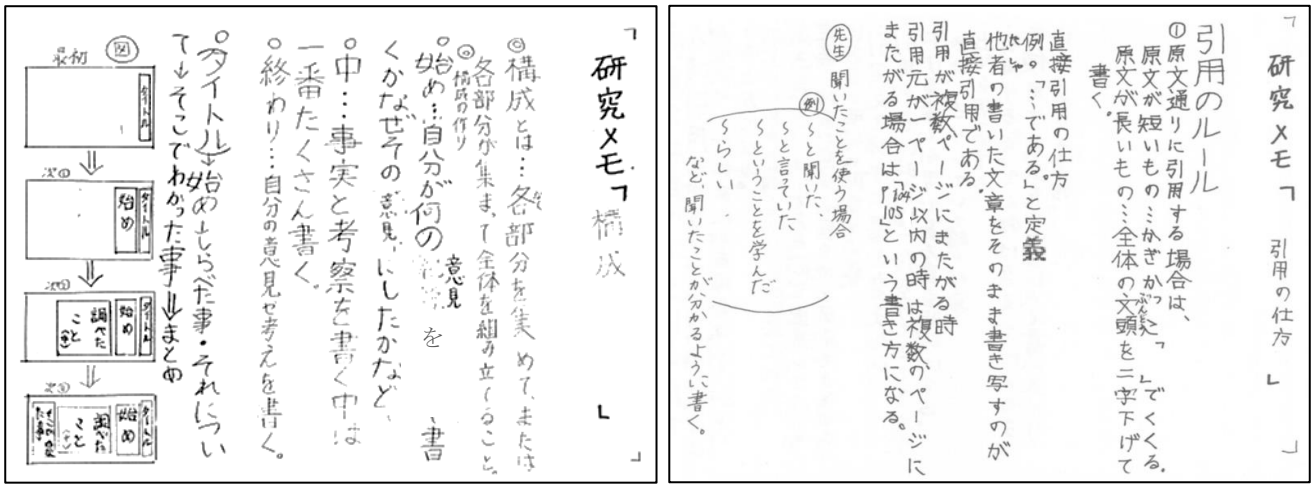


図１　研究メモ例

(3)　第７時　展開　意見文をお互いにチェックし、自分が推敲するところを決定する

最初に友達の意見文を読み、間違っているところや、もっとよくなると思う言葉や文に青色で線を引き、コメントを入れる。その際気を付けることは、斜め読みをせず、一つ一つ丁寧に文章をよくする視点をチェックしていくことだと指示した。児童はまず、友達の意見文をじっくりと読み、次に「研究メモ」（図１）を使いながら、何度も読み返して確認していた。間違っていてもよいから、できるだけたくさんチェックを入れるように伝えたことで、たくさん書き込むことができていた（図２、図３）。

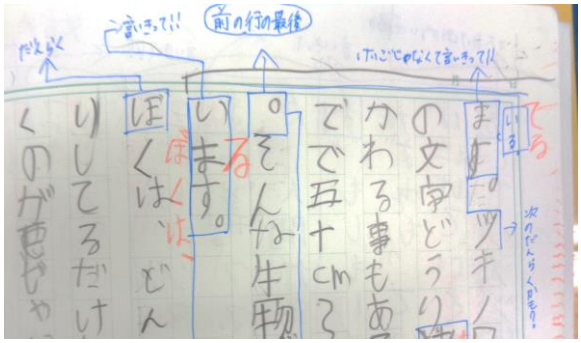


図２　友達からのチェック入り原稿（１）

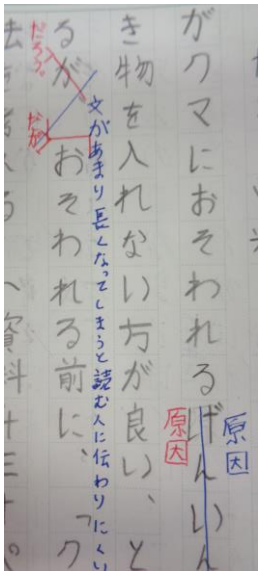


図３　友達からのチェック入り原稿（２）

次の学習活動で、チェックしてくれた友達と青色でチェックを入れた内容について話合いを行い、書き手本人が修正すると決めたところは赤線を引くように指示した。その際、書き手の意図を大切にするために、指摘されたところを直す必要がなければ訂正しなくてもよいと指示した。第７時は、訂正箇所を決めるまでをめあてとしていたが、児童は話合いの流れで訂正まで行っていた。「『始め』に自分の意見を書かなくてはい

けないからここに〇〇君の考えを入れた方がいいよ」「そうか」などと、具体的にどのような文にしたらよいのか一緒に考えて赤字で訂正しており、意見文をよりよい文章に直すことができていた。中には「もっと詳しく」という指摘に対して、具体的にどうしたら詳しくなるのか悩んでいる児童もいたが、友達と一緒に考え、児童なりの推敲を進めることができた。

(4)　第７時　振り返り　本時で学んだことや困ったことを振り返る

振り返りの場面では、推敲の難しさを実感しながらも、チェックすることができたという達成感や、次時への期待を記していた。さらに、友達に見てもらったことで、自分は分かっても相手に伝わらないことがあることに気付き、読み手を意識した文章作りに意欲がもてた児童もいた。さらに、振り返りの記述に、「『詳しく』と指摘されたけど、どんな言葉を加えたら詳しくなるのか分からない」など、推敲して困ったことを書いた児童は、次時の相談会につなげられた。

(5)　第８時　「相談会」を開く

第８時の授業では、第７時で青字のチェックが入りにくかった「文章表現」に焦点を当てて授業を行った。「より分かりやすく、相手に伝わるように」文章表現を工夫するにはどうしたらよいか、児童の意見文を例に挙げながらよりよい文章表現について考えた。また、前時のペアと違う相手に相談させると「見る人を変えたら、自分の気付かなかった事に気付くことができて、昨日よりよい意見文になった」という内容の振り返りを書く児童がいた。そして、前時の振り返りで困ったことをあげた児童は、相談相手を変えたことにより、解決につなげていた。

第８時の児童の振り返り

児童Ａ　友達と一緒に直したところと、自分で見付けた悪いところの直しで、自分なりによい文ができあがったと思いました。

児童Ｂ　友達が指摘してくれたこと（文章表現）をいかせました。

児童Ｃ　今日はすごく文章表現を直しました。もう一回書くと、「ここがおかしい」と分かる。〇〇君のアドバイスも参考になった。

５　考察

児童にとって必要感のある言語活動として「尾瀬についての意見文を書く」ことを設定した。「尾瀬」については、４年生の社会で学習しており、貴重な自然で、群馬県にとって誇るべき場所であること知っていた。しかし、その「尾瀬」に対して意見をもつためには、児童一人一人がその貴重さを心から感じさせる必要があった。「尾瀬」に関して、児童が意見をもちやすそうな資料を選択し提供すると、尾瀬には様々な課題があることを知り、児童なりに考えた解決策を示した意見文や、「尾瀬」という貴重な自然を守っていきたいという意見文が書けた。

最初は推敲という「文章をよりよくする」という「できた」「できなかった」がはっきりと分かりにくい学習に対して、意欲的になれない児童がほとんどだった。しかし、「文章をよくする視点」を自分たちで見付けたことや、使い方を勉強し合う「研究会」と、推敲して困ったことを相談する「相談会」を学習計画の中に位置付けたことにより、自分が学習したことを意見文に直接活かせる学習であることを知り、意欲につながった。また、うまく推敲できなくても「相談会があるから大丈夫」という安心感にもつながった。明確な視点をしっかりもたせた推敲は、児童にとって確実に達成感につながり、一人一人の意見文を最初の段階と比較すると、よりよい文章に推敲できていた。この学習活動を積み重ねていくことで推敲する力が向上し、相手に自分の意見が正確に伝わるように、書く力が育成できると考えた。

言葉について考えたり、違う言葉に置き換えたりすることは、語彙の少ない児童にとって難しく、困難さを感じて立ち止まる児童がいた。また、児童が文章表現とは何か追究している時間も、調べるほど多岐にわたることが分かり、何を「研究メモ」にまとめようか迷っていたため、支援することが多かった。そのため文章表現については、教科や単元を超えて日頃から言葉や文に関心をもたせて、意味や感じ方を考え、児童の言語感覚を育てていく必要性を感じた。日常的に言語感覚を育てることによって、「文章をよくする視点」だけに留まらず、表現の工夫に気付けるのではないかと考えた。